
王道展開お断り

屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王道展開お断り

【Nコード】

N2784BA

【作者名】

蜃

【あらすじ】

ひよんなことから異世界トリップした女子高生の沙紀。拾った人たちに恩返しするために後宮入りし、忘れられたところで脱走しようとしていたのだが、皇太子殿下に目をとめられてしまい…。ノリと勢いで突っ走ったラブコメ話。ちよつと長めですみません。テンプレ展開希望の方にはお薦め出来ない話となっておりますのでご注意ください。

ティルザ帝国の後宮にて、いつも通りの熾烈な争いが幕を開けた。
「あら、今日もまたずいぶん濃い化粧ね、そんなお顔で陛下にお会いしたら気味悪がられるのではなくて？」

「そちらこそ、いつも通りに眉が無くて恐ろしいお顔なこと。まるで男の方みたい」

ひとしきり悪口を言った側室たちは、揃って「ほほほ」と笑い声を上げる。

一方の私はといえば、彼女たちの喧嘩を眺めながら、別のことを考えていた。

ああ、自己紹介が遅れました。私は原口沙紀、容姿はまあ中の上程度で、頭は中の下くらいのその辺にいそうな女子高生だ。だけど、友だちと遊びに行つて幽霊屋敷に入ったところ、別の世界へ来てしまった。何でなのかは分からず、自分なりにたまたま空間が繋がる現象みたいなものに巻き込まれたのだと思つている。何しろ帰り方も分からないし、それらしいファンタジーな展開も起こらないため、元の場所に帰ることはもう諦めていた。

そこで、気の良い人たちに拾われて、何とか暮らしていたのだけど、ある日突然領主様がやってきて、自分の娘を皇太子の後宮へやらなければならなくなつてしまった。だが、陰謀まみれな上に、あまり良い話を聞かない皇太子のもとに娘をやりたくない。何より、娘には婚約者がおり、二人は愛し合つていて引き裂きたくない。そこで、娘と年恰好の似た人物がいると聞きつけて、私のところへやってきたのだと言う。その令嬢と私は、顔や体格は全く似ていないのだが、年齢と髪の色は同じであり、皇太子は娘の顔を全く知らないの以身代わり役としては問題がないのだそうだ。

身代わりになつてくれれば礼をすと言われ、私は世話になつた

人たちに恩返しすべく、後宮へ行くことを決めた。それがここまでの経緯。

と言っても、後宮に美姫は掃いて捨てるほどいるため、私はまだお手付き状態にはなっていない。

恋愛小説だとありふれた展開だ。

この後、ヒロイン役が噂とは違う皇太子と出会ってお互い一目ぼれして困難を乗り越えつつ、結ばれるというのが王道なんだろう。

けれど、私はそれじゃあ困る。

何としても皇太子に嫌われて、出て行きたいのだ、後宮を。

なぜなら、私には大切な約束があるから。

彼はきつと待っているだろう、お前の力が必要だと言った時の顔は、嘘をついている顔じゃなかった。それに、私だって彼との約束が叶うのをずっと楽しみにしていたのだ。だけど、領主さまが提示したお金と土地はのどから手が出るほど欲しいものだった。

なぜなら、私を拾って世話してくれた夫婦には、病気の子どもがいる。さらに最近では奥さんが病がちになってしまった。彼らには医者にかかるお金はない。でも、申し出を受ければ無料で医者にかからせてくれると言う。それを断るなんて、私には出来なかった。

「さて、どうしたらいいかな」

唸るようにつぶやく。

この足りない頭で色々と考えたりもしたのだが、せいぜい騒動を起こす、とかもめ事を起こすといった程度のことしか思い浮かばない。

それだと領主様に迷惑がかかってしまう。もし迷惑などかけて、土地を取り上げられでもしたら困るではないか。私はため息をついた。もう少し頭が良かったらと思うがこればかりは仕方がない。

視界にはいまだけん制し合っている女性たちと、帝国の後宮の様子映る。

何しろ後宮と言うので、江戸の大奥とか中国の後宮とかオスマン帝国のハーレムみたいなのを想像していたのだが、ちょっと違った。

どちらかという建物とは古代西洋の宮殿に近く、無駄に敷地が広い。大量の女の人がいることに違いはないし、権謀術数が渦巻きまくっているのも同じ。お手付きになれば出世するし、子を産めば「夫人」という地位を得られたりするところも同じなので、後宮というのはどこへ行ってもそう大した違いはないのかもしれない。

ちなみに、帝国の気候は温暖で、冬でもそんなに雪は降らなくて結構過ごしやすい。

食べ物も地球のものと似ていたが、肉が多い。最初こそ胃もたれし、ごはんともそとしようゆが恋しくなったものの、今では慣れた。でもたまに恋しくなるけどね。

などと逃避していたら、侍女が「皇太子殿下がいらしました」と騒ぎだした。それまでツンケンしていた女性たちの顔色が一気に変化する。

すると、優美服装をした青年がゆったりと歩いてくるのが見えた。デIFOオス殿下だ。

帝国での服装は、昔の中国に似てるけど、人々の容姿は西洋に近い。殿下は金糸や銀糸できらびやかに飾った重そうな布地を使った服装にしなやかな体を包み、こちらへやってくる。

そんな彼は第一皇子にして皇太子で、めっちゃ有能、超美形。さらさらの黒髪に、紫がかった青い切れ長の瞳で、その流し目はほとんど百発百中女性のハートを射ぬくとか何とか侍女がうつとりと語っていたつけ。まあ、人によっては効果がないみたいんだけどね。私はその紫の目がこつちを向いた気がして目を反らした。気のせいじゃないのは分かっている。このところ、ストーカーかと突っ込みを入れたくなる頻度で、彼は私の視界内に出没するのだ。偶然じゃあり得ないほどの確率で、いる。

何なんだろう、いつも思っていたけど、あんなに美女美少女が大量にいるのにどうしてそっちから選ばないのだろう。自分感覚だと、普通の男性はああいふ胸とお尻の大きめな女性、もしくは人形みたいに可愛い清楚な女の子にそえられるものなんじゃないの？

じゃあ殿下が普通じゃないってことか。地味顔が好きということなのだろうか。

だとしたら、これ、フラグ的なものが立ってるよね、あの人に嫌われる、または必要ないと思われなくてはならないんだけど、何か難易度が上がってる気がする。

とか思っていたら、こっちへ歩いて来ちゃったよ、おいおい、どうすんだ私。

ディフォス殿下は、ひれ伏しもしない私の前に立つと、ちょっとはにかんだような笑みを浮かべて、どことなく嬉しそうに、けれど真剣に言った。

「エジェーナだったな、今宵はお前を召すことに決めた、良いな」「嫌です」

私は即答した。すると、殿下はショックを受けたように顔をゆがめる。その表情から怒りを読みとった私は、慌てて付け加えた。

「あの、今日は具合が悪いので、殿下の寝所を汚したくないのです。なので辞退させて頂きます」

危うくお前は逆らえる立場にないとか言われて無理やり連れていかれるところだった。殿下はそれを聞くと、痛ましげな表情になり、侍女を呼びつけた。

「侍医を連れて来い。……分かった、今日はゆっくり休め、体調が良くなったらまた声を掛ける」

「お気づかいありがとうございます」

私はしおらしく頭を下げて見せたが、内心は焦っていた。

目をつけられてしまったということは、また近いうちに呼ばれてしまうだろう。また具合が悪いとも言えないし、好きでもない男の寝所になんか意地でも行きたくない。なぜ、殿下はこんな平凡より少しだけ見られる程度の私に目をつけたりしたんだろう。泣きたくなってくる。

どうしよう、と思つて顔を上げると、他の側室方の視線がぶすぶす突き刺さる。すいませんごめんなさい私だつて不思議なんです殿

下に目薬あげたい気分です。もしくは眼鏡。

殿下はため息交じりに後宮を出て行く。その憂い顔に、とろけるような表情を浮かべる妃の皆さまと、ついでに侍女と下働きの方と小指を立てた宦官の方々。

私は彼らが殿下の背中を見ている隙に、そつと自室へと向かったのだった。

■ ■

部屋へ戻ろうとした私だけど、後ろから呼びとめる声がして思わず振り向いた。

そこにいたのは、金髪碧眼の可憐な美少女で、険しい顔で私を睨んでいる。ああ、もしかしてさっきのことと文句でもあるのかな。けどそれ言われても困るしな、と思いつつ立ち止まって待っている、侍女を引きつれた彼女は私の側へやってくると言った。

「ごめんなさいね、少々お訊ねしたいことがあって。先ほど殿下に言った事は本当なの？」

「あの、具合が悪いつてことですか？」

「そう、だって、どう見てもそうは見えないんですもの」

おっとりとした仕草で訊ねてくる彼女、でも目が笑っていない。怖いです。

「まあ、その女性特有のなんとやらといいますが、あはは」

「あら、そうでしたの。てっきりあなたは殿下の寝所へ上がりたくないのだとばかり思いましたのよ」

残念そうに、まつ毛がびっしり生えた大きな目を伏せる。うつわ可愛い。一応異世界だけど人間は人間なので思う、同じ人類とは思えない。

恐らく彼女の真意は、目をかけられてるっぽい私がいなくなれば

自分に目が向くのでは、ということなのだろう。と言うか、私なんぞを見つけられてこっちが目に入らないのが理解出来ないが。

「あはは、分かります?」

苦笑気味にそう言っていると、彼女はぱつと顔を上げて、やおら私の両手をつかむと言った。

「やっぱりそうでしたのね、ねえ、わたくしのお願いを聞いて!」

「え……?」

まさかそう来るとは思わず、私は驚いた。彼女はぎりぎりと細くて繊細な手とは思えないほどの力で私の手をつかみながら、懇願してきた。とにかく話を聞いてあげることにする。

そして、彼女の口から飛び出した意外な話に、私はしばらく悩む羽目になってしまった。

■ ■

「ああ、疲れた」

部屋へ戻った私は、ぐつたりと椅子に座り込んだ。

私を呼びとめた超美少女は、ローティアと言い、隣国の王女様だった。しかも、すでに皇太子の第一夫人の座についているのだが、彼はどうしても彼女を見てくれないのだと言う。その上、最近はお目に付けていることに気づいた彼女は、どうすれば彼の目を自分に向けられるのか、つまり、私みたいになれるのかと聞いてきた。殿下に興味がないのなら、協力してもらえるのではと考えたらしい。なんていじらしい! あまりの可愛さにこちらが惚れそうになっただけだ。

やっぱり皇太子殿下の目は狂ってる。

あんなにも自分を愛してくれる人がいるのに、どうして彼は他に目を向けてしまうのだろう。私は彼女に、地味になる特訓をする約

束をしたけれど、それでどうにかなるか是不知。

それに、いつまた殿下に声を掛けられてしまいかもわからないのだ。

「困ったな、侍医さんには事情（アノ日）を説明したら分かってもらえたけど、殿下をずっと騙しとおす訳にもいかないし、いつそのこと死んだフリとかした方がいいかな」

ここへ来て半年ほどになるが、時々後宮から死人が出ることは知っている。そのほとんどが殿下か陛下のお手付きになった身分の低い女性であることからして、恐らくは身分ある女性たちによる殺害だろう。動機は嫉妬とか邪魔になったとか妊娠しちゃったとかそんな感じ。それ以外だと、毒味役がちょこちょこ死んでいる。こんなところへ娘をやりたくないと言った領主様の気持ちが良くわかる。

ちなみに、身代わりになった貴族令嬢エジーナは、無事に好きな人と別の名前で結ばれることが出来たと聞かされた。それについては良かったと思う。

それに、冷酷だという皇太子のうわさも嘘だった。実際、彼は結構細やかに気づかいの出来る人物であり、優しい人だった。側室が亡くなると悲しげに落ち込むし、そういう時は励ましたくなるほどだ。

「別に殿下が嫌いって訳じゃないんだけど」

それでも、寝所に上がるのは全力でお断りだ。

彼が友人としてなら付き合えるが、恋愛の対象として見ることは出来そうもない。

時刻は夜。

先ほど私は談話室にいた。側室たちは、夕食後のひとときを必ずそこで過ごすことになっている。そこに皇太子が訪れて、その夜を共にする者を指名するというのがこのやり方らしい。まあ、その前に指名されるという場合もあるらしいけど、大抵はその日の気分に合わせてお好きにチョイスして下さいねといった感じ。なんだか物になった気分だ。

私は思考を引きもどし、殿下について考察してみる。

「ようするに、タイプじゃないのよね、うん」

はあ〜と深い深いため息をついて、私は窓に目を向ける。

誰か助けて欲しい、と不意に思った。あの太陽みたいな笑顔を思
いだして、思わず目じりから透明な雫が頬を伝う。

会いたい。

彼に、彼の家族に会いたい。けれど、その思いが叶うこともなく、
静かに夜は更けて行く。

■ ■

ローティアに地味になるための特訓？を続けて三日経った頃。つ
いに窮地が訪れた。殿下がまたしても私を召したのである。それも
昼間から。何やら公務がないとかで、夜とぎまではしなくても良い
から話をしようと言われたので、渋々行くことにする。ああ、行き
たくない。

通された部屋にはお茶の良い香りが漂っていた。すでにテーブル
についていた殿下に挨拶をすると、椅子に掛けるよう言われたので、
その通りにする。籐のかごに盛られた焼き菓子が美味しそうだが、
食欲は全く無かった。

「良く来てくれたね、ずっと君に話があっただ、とても大切な話
だよ」

どう答えたら良いものかわからず、私は黙りこくる。すると、デ
イフォス殿下は立ち上がって私の隣に來ると、髪をひと房掴んで顔
を寄せて、耳元にささやくように言った。

「ずっと、君のような人を待っていた。私は君が好きだ……君が望
むならば、何でも与えよう、第一夫人の座も、土地も、だから、少
しずつでいい、私の事を見て欲しい」

告げると、彼は私の前にひざまずいて手を取り、その甲に口づけを落とす。

思わず手を引っ込めかけたら、手首をつかまれた。心臓が早鐘を打つ。心の中にあるのは、ただ嫌だという思いだけだった。

「どうして……」

私の唇から、悔しい思いが滑り出た。ここ数日ですっかり良い友人になったローティアのことを思えば、彼のセリフは残酷に聞こえた。

「そうだね、君の健気さに惹かれたんだと思う。誰とも対立せず、贅沢も望まない姿に、心が動いたんだ。ただ側にいてくれるだけでいい、けれど、私以外は見ないで欲しい」

違う、と言いかけて思わず口をつぐむ。彼の瞳に恐怖を覚えたからだ。何か、狂気めいたものを感じ、背すじが凍る思いがした。

もう逃げられないのだろうか？

私は何も言わずに立ち上がると、部屋を飛び出した。殿下は追ってこなかった。追わずとも、どこにも逃げられないことがわかってるからだ。

だから、私は仕方なく部屋へと向かい床に座り込んでひとり泣いた。

ローティアが訪ねてきて、私は心配する彼女に事情を説明したが、流石の彼女も私をここから出してはあげられないと言って、謝られてしまった。

それから、暗くなるまで私はただじっとしていた。頭の中は、脱走することではいっぱいだった。

■ ■

静かな夜、疲れからか、うとうととしていた私は、ぼうつとしたまま窓を見やった。何だろう、何か動いたような気がするんだけど……？

そして、ぎよつとして椅子から転げ落ち、そのまま這いずるように窓に向かう。

なんか、あり得ない人がいたんですけど！

「あ、いたいた、無事か？」

窓ごしにぼやけて聞こえる声に、私は震える手で鍵を外して窓を開ける。すると、宦官の服装に身を包んだ青年が、明るい笑顔で「よう」と片手を上げるのを見て、言った。

「な、何でここにいるの？ どうやって入ってきたの、その格好は、まさか本当に？」

「何か盛大に誤解してるみたいだけど、宦官にはなつてないよ。ただ、知り合いの衛兵にちよつと金掴ませてちよろつと侵入しただけ。凄いだろ、村出身の奴がいたんだぜ」

彼は目を輝かせてスゲー偶然だよな、などと言って明るく笑っている。

私はがつくりと肩を落として、朗らかに笑う侵入者を見ると、思わず笑みを浮かべてしまった。

短めの茶色い髪、そばかすの散った顔、広い肩に、細い金色の目。美形と言う訳ではないが、温かい笑顔が魅力の二つ年上の青年。その笑顔を見るたびに、私の胸は締め付けられる。彼は、イスト。私を拾ってくれたヘッセン夫妻の次男だ。

色々あって、私は彼に恋してる。と言っても、まだ気持は伝えていない。何だか妹扱いされている気がして言えないのだ。言ってしまうと、今の関係が壊れたらもつとずつと嫌だから。

「大体、まさか本当について聞きたいのは俺の方だし。あれからずっと戻ってこないからさ、居心地良くて側室に収まっちゃったんじゃないかって心配で、つい」

「つい、ですることじゃないと思う。」

大丈夫、側室とかまだ相変わらず名前だけだから。ただ、どうやって脱走しようかずっと悩んで、波風立てずに消えるって難しいんだね」

困ったように言うと、もの凄く大きなため息が聞こえた。

「あゝ良かった、俺ももしかしたらサキが約束忘れちゃったんじゃないかって思ってたさ」

「忘れてないよ、一緒にハレン村の名物を世界に広めるんだっていう話。イストと行商に行ってた毎日はずっと楽しくて、戻れるなら早く戻りたいなと思ってたんだから。」

そうだ、村の名物、ここでもちよつと吹聴していたよけど、貴族の人から注文入ったかな？」

「ああ、それが……！」

何やら納得したように楽しげに笑うイスト。その笑顔を見ていたら、どうしても元の場所に帰りたくてたまらなくなる。すると、後ろの木の後ろから、細く声が上がった。

「おい、イスト、会えたか？ 無事だったか？」

私は驚いて問うた。

「え、誰？」

「ええと、友だち。何か旅しててさ、宿が無くて困ってた所を泊めてやったら近くの山で暴れてる魔物倒しちゃってさ、凄いの何のって。話を聞いてみたら、前世でうっかり神様に殺されちゃったおわびに強くしてもらったとか言ってた。」

で、その友だちがお礼したいって言うてくれてさ、じゃあって事で、サキを連れ出す手助けをお願いしたんだ」

「へ、へえ……そっか」

私は、その人と会ったらきつと〇APANという国について語り合える予感がしたが、その前にちよつと確認しなきゃならないことが浮かんだので訊ねてみた。

「その人が強いのは分かったけど、私を連れ出していいの？ 領主様に迷惑がかかって、おじさんたちが土地を取り上げられでもした

らどうするの？」

「ああ、それね。もう平気だよ、領主様はもう隣国の貴族って扱いだから。あそこはもうティルザの領地じゃないんだ。お隣は後宮とかない国で、ハレン村の名物に惚れた国王が皇帝陛下に頼んで買い取ったんだよ、エジエーナお嬢様も元の名前に戻ったし」

私は馬鹿みたいに目を見開いた。

ちよつと留守にしてた間に色々あったんだなあとしみじみしつつ、言う。

「じ、じゃあ出て行っているの？ またハレン村に戻れるの、私」

「もちろん！ あ、でもさ、サキがここに居たいって言うなら無理強いはいしないよ」

「どうして？」

なぜそんな悲しいことを言い出したのかわからず、私はイストを睨んだ。すると、彼は何だか苦しげに目を細めて言った。

「だって、見てみるよ、今のお前の服装とか髪とか飾りとかさ、血色だって向こうにいた時よりいいし、村へ戻れば、こんな贅沢はさせてやれない。俺は戻って来て欲しいよ、けど、サキに今持つてるもの捨ててまで来いなんて言えないよ」

言われて、自分の着ているドレスを見下ろす。村で着ていた粗末な服とは違い、着心地も良い。ここにいれば、ずっとこんな服を身にまとえるし、飢えることもないのだろう。だけど――！

「こんな服なんかいらない！ 毎日何もすることがなくて人を陥れて遊んで憂さを晴らしたり、誰にも愛されないまま枯れていたり、ここはそういう場所なんだよ！ それにももし寵愛を受けたりしたら嫉妬をかって殺されちゃうんだよ、ここは。あの温かい村とは全然違う、それに私はイストが……」

感情のままに言いかけて、私は急いで口をつぐんだ。

目だけ上げて見てみれば、彼は驚いた顔をしているが、頬の辺りが赤い。私は帰りたいと言おうとしたけれど、何だか上手く言葉が出てこない。すると、イストが突然私を抱きしめた。大きな胸にす

つぱりと覆われて、私は息を飲む。

「ごめん、でも嬉しくてさ。イストが……の続きは、後で教えて。俺もサキに言いたい事があるから」

「う……うん」

私は自分からイストにぎゅっと抱きついて、笑った。

帰れる、村に帰って、イストやその家族とまた暮らせると思っただけなんだか泣けてきた。少し前までの絶望感がうそみたいだ。

「さて、じゃあ行こう。あいつも待つてることだし」

「うん、そうだね」

体を離して、私たちは笑い合った。そして、窓から出て行こうとしたとき、唐突に後ろの扉が開いて、ローティアが顔を出した。だが、もつと悪いことに彼女の後ろからディフォス殿下まで現れたのだ。

「……貴様！ エジエーナに何をしている！」

腰に帯びていた短剣を引きぬいて、ディフォス殿下がイストに斬りかかる。その瞬間、イストは私の腰を抱き寄せて、窓の外へと飛んだ。視界が回り、私は思わず額を押さえる。

「何って、俺はこいつを連れ戻しに來ただけだよ！」

そう言つと、茂みから黒ずくめの青年がのっそりと姿を現した。どこことなく物憂げな雰囲気的青年で、今まで気づかなかったが傍らに美少女がふたりいる。彼女は私が見ているのに気づくと、可愛らしくウインクして、大丈夫と言ってくれた。

多分転生者とおぼしき青年は、私とイストを見てにやりと笑つと言った。

「よおし、そんじゃあ行きますか！」

青年は手を前方にかざすと、口もとで何か言う。恐らく魔法か何かだろう。初めて見るのだが、風が強くて全く見えない。見たいのに。

と悔しがっていると、体がふわりと浮かぶ。気がつけば、平均的な日本の一軒家くらいまで巨大化した鳥があり、私はイストに抱え

られてその上へと乗る。青年と美少女はもう一匹呼び出してそちらへ騎乗したようだ。

「くそっ！ 魔導師どもを呼べ、侵入者だ、絶対に連れていかせるな！」

殿下の悲鳴にも似た叫びが聞こえる。私はちよつと胸が痛んだ。だから願った。私がいなくなることと殿下の目が冷めて、ローティアの気持ちに気づきますようにと。

恐る恐る下を見れば、ローティアの驚いた顔が視界に飛び込んできく。私は笑顔で「ありがとう、楽しかったよ！ 何か思いが叶うと良いね！」と出せる限りの大声で叫んだ。

「んじゃ、村へ行くよ！」

「ああ、ありがとな」

「いいってことさ。戻ったら名物で祝杯あげようぜ！」

青年が親指を立てて笑う。その視線が意味ありげに私に向いていることに気づく。きつと、彼も私の出身がわかってるのだろう。だから、私も意味ありげに微笑み返した。やがて、二羽の距離が離れると、飛び方がゆっくりになる。

そこで、イストが話しかけてきた。

「最後に手を振ってたの、友だち？」

「うん、ちよつとの間だったけど、良くしてくれたの。王女様なんだって」

「へえ、そつか。じゃあちよつと寂しい？」

「ちよつとね、でも村へ帰れば忙しいし、元々あそこは私がいるような場所じゃないから」

そう答えると、イストはちよつと咳払いした。

「さっき言ったお前に言いたいことなだけどさ……」

「うん」

「俺、ずっとサキに側にいて欲しい。だからさ、色々と落ちついてからでいいから、一緒にならないか？」

一瞬、思考が麻痺したような気がした。ただ、胸にじんわりと温

かさが広がって行くのを感じる。

「お前を後宮何かにやらなきゃならなくなつて、ずっと苦しかった。いつも、自然と支えてくれてた、側で笑つて、何とかなるつて言つてくれただろ、あれでずいぶん救われたんだ。お袋も、妹もお前のお陰でだいぶ良くなつたし……だから」

「嬉しい！」

私は振り向いて言つた。

ちようと抱えられるような体勢なので、抱きつけないのが悔やまれるけれど、その代わり腰に回された腕を強くつかむ。嬉しくて、涙がこぼれた。

「ずっと、そうなたらいいのにつて思つてたの」

やや掠れた声で言つと、今度は後ろから強く抱きしめられた。後頭部に、彼の唇が当たっているのがわかる。その唇が微かに震えているのもわかつた。

「そつか、良かつた。断られたらどうしようかと思つて、ずっと怖くてさ」

「私も、妹と思われてる気がして言えなかつたの」

そう言つと、後ろから小さな笑い声が聞こえた。

「お互い臆病だつたつて訳か、あゝあ、こんなことならもつと早く言つとけば良かつた」

「そうだね」

私たちは鳥の上で、ひとしきり笑い声を上げた。それから、色々なことを話した。ほとんどはどうでもいよいような、けれど大切な話を。

こうやって、側にいて話せること。それがどれほど幸せなのか、村の姿が見えてくるまでじつくりと噛みしめ、私は遠く離れてしまつた両親に心の中でつぶやいた。

私、ここで精いっぱい幸せになるから、と。

【了】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2784ba/>

王道展開お断り

2012年1月7日01時34分発行